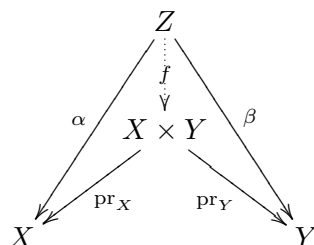


- 前回主に扱ったこと：商環と環準同型写像.
- 商環の普遍性を確認し，環準同型定理を導く（それぞれ集合版にも触れる）.
- イデアルが互いに素であることを定義し，中国剰余定理を導く.
- 応用として「2 で割った余りと 3 で割った余りから 6 で割った余りが分かる」といった常識的事実（105 減算）や，大きな整数正方行列の行列式の計算方法（モジュラー算法）を見る.

普遍性の例：集合  $X$  と  $Y$  について，直積集合  $X \times Y$  は次の性質を持つ（ここで  $\text{pr}_X : X \times Y \rightarrow X, (x, y) \mapsto x$  と  $\text{pr}_Y : X \times Y \rightarrow Y, (x, y) \mapsto y$  は射影である）：

「任意の集合  $Z$  と任意の写像  $\alpha : Z \rightarrow X, \beta : Z \rightarrow Y$  について， $\alpha = \text{pr}_X \circ f, \beta = \text{pr}_Y \circ f$  となるただ 1 つの写像  $f : Z \rightarrow X \times Y$  が存在する」



証明： $f : Z \rightarrow X \times Y, z \mapsto (\alpha(z), \beta(z))$  がそのような写像であることが確認できる.

定義：可換環  $(R, +_R, \times_R, 0_R, 1_R)$  と  $(S, +_S, \times_S, 0_S, 1_S)$  について，直積集合  $R \times S$  は可換環の構造  $(R \times S, +_{R \times S}, \times_{R \times S}, (0_R, 0_S), (1_R, 1_S))$  を持つことが確認できる. これを  $R$  と  $S$  の直積環と言って，単に  $R \times S$  と書く. ここで，環演算は成分ごとに以下のように定義している.

$$\begin{aligned}
 +_{R \times S} : (R \times S) \times (R \times S) &\rightarrow (R \times S), & ((r, s), (r', s')) &\mapsto (r +_R r', s +_S s'), \\
 \times_{R \times S} : (R \times S) \times (R \times S) &\rightarrow (R \times S), & ((r, s), (r', s')) &\mapsto (r \times_R r', s \times_S s').
 \end{aligned}$$

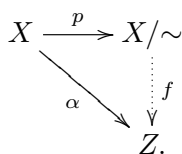
注意：集合  $X, Y$  の直積  $X \times Y$  の普遍性に現れる「集合」と「写像」を「可換環」と「環準同型写像」に変えると，直積環  $R \times S$  の (**CRing** における) 普遍性になっている.

命題 (商集合の普遍性)：集合  $X$  とその上の同値関係  $\sim$  による商集合  $X/\sim$  は次の性質を持つ（ここで  $p : X \rightarrow X/\sim, x \mapsto C_x := \{y \in X \mid y \sim x\}$  は自然な全射）：

「任意の集合  $Z$  と任意の写像  $\alpha : X \rightarrow Z$  について，

$$\forall x_1 \in X, \forall x_2 \in X, x_1 \sim x_2 \Rightarrow \alpha(x_1) = \alpha(x_2)$$

ならば， $\alpha = f \circ p$  となるただ 1 つの写像  $f : X/\sim \rightarrow Z$  が存在する」



証明： $\alpha = f \circ p$  とすると， $\forall x \in X, \alpha(x) = f(C_x)$  でなければならないので， $f$  は存在するとただ1つ．よって  $f(C_x) = \alpha(x)$  によって  $f: X/\sim \rightarrow Z$  が well-defined であることを言えばよい．つまり  $\forall x \in X, \forall x' \in X, C_x = C_{x'} \Rightarrow \alpha(x) = \alpha(x')$  を言う．定義によって  $C_x = C_{x'} \Leftrightarrow x \sim x'$ ．

系（集合での準同型定理）：集合  $A, B$  と写像  $h: A \rightarrow B$  について， $A$  上の同値関係  $\sim_h$  を

$$a_1 \sim_h a_2 \Leftrightarrow h(a_1) = h(a_2)$$

と定めると，単射  $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow B$  は全単射  $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow \text{Im } h$  を誘導する．

証明： $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow B$  は単射である（実際  $a, b \in A$  について， $\bar{h}(C_a) = \bar{h}(C_b)$  は  $h(a) = h(b)$  と同値で，定義よりこれは  $a \sim_h b (\Leftrightarrow C_a = C_b)$  と同値）．よって  $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow \text{Im } h$  は全単射である．

命題（商環の普遍性）：可換環  $R$  とそのイデアル  $I$  による商環  $R/I$  は以下の普遍性を持つ：

「任意の可換環  $Z$  と任意の環準同型写像  $\alpha: R \rightarrow Z$  について，

$$\forall r \in R, \forall r' \in R, r \equiv r' \pmod{I} \Rightarrow \alpha(r) = \alpha(r')$$

ならば， $\alpha = \bar{\alpha} \circ \pi$  となるただ1つの環準同型写像  $\bar{\alpha}: R/I \rightarrow Z$  が存在する」

$$\begin{array}{ccc} R & \xrightarrow{\pi} & R/I \\ & \searrow \alpha & \vdots \bar{\alpha} \\ & & Z \end{array}$$

証明：（集合論的）写像  $\bar{\alpha}: R/I \rightarrow Z$  で  $\alpha = \bar{\alpha} \circ \pi$  となるものがただ1つ存在するので（すぐ前にやった）， $\bar{\alpha}$  が環準同型であることを言えばよいが， $\forall x \in R, \bar{\alpha}([x]) = \alpha(x)$  から容易に確認できる．

定義：可換環  $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$  の部分集合  $S \subseteq R$  が以下の条件を満たすとき， $(S, +|_{S \times S}, \cdot|_{S \times S}, 0_R, 1_R)$  は可換環になる．このとき  $S$  を  $R$  の部分環と言う．

- (1)  $1_R \in S$ .
- (2)  $\forall s \in S, \forall t \in S, s \pm t \in S, st \in S$ .

例： $\mathbb{Z} \subseteq \mathbb{Q}$  は  $\mathbb{Q}$  の部分環．一方  $2\mathbb{Z} \subseteq \mathbb{Z}$  は，(1) が成り立たないため，この講義では  $\mathbb{Z}$  の部分環ではない（ $\mathbb{Z}$  のイデアルにはなっている）．

命題：可換環の環準同型写像  $f: R \rightarrow R'$  について

- (1)  $\text{Im } f$  は  $R'$  の部分環．
- (2)  $f^{-1}(0_{R'}) (= \{x \in R \mid f(x) = 0_{R'}\})$  は  $R$  のイデアル．

証明：容易．

記法： $f^{-1}(0_{R'})$  を  $f$  の核と呼び、 $\text{Ker } f$  と書く。

定理（環準同型定理）：可換環の環準同型写像  $f : R \rightarrow R'$  について、単射環準同型写像  $\bar{f} : R/\text{Ker } f \rightarrow R'$  は、(すぐ下の命題によって) 環同型  $\bar{f} : R/\text{Ker } f \xrightarrow{\sim} \text{Im } f$  を誘導する。

証明： $x, x' \in R$  について、以下を確認すればよい： $x \sim_f x' \Leftrightarrow x \equiv x' \pmod{\text{Ker } f}$ 。

( $\Rightarrow$ )： $f(x) = f(x')$  ならば  $f(x - x') = 0_{R'}$ 。よって  $x - x' \in \text{Ker } f$ 。

( $\Leftarrow$ )：上を逆にたどればよい。

命題：可換環の環準同型写像  $f : R \rightarrow S$  について、以下の2条件は同値である。

(A)  $f$  は環同型写像

(B)  $f$  は(集合論的)全単射

証明： $(A) \Rightarrow (B)$  は明らか。 $(A) \Leftarrow (B)$  を言うには、 $f$  の(集合論的)逆写像  $g : S \rightarrow R$  が環準同型であることを示せる。例えば  $\forall a \in S, \forall b \in S, g(a + b) = g(a) + g(b)$  を示そう。

今、 $f$  は全単射なので  $\exists! A \in R, a = f(A)$  かつ  $\exists! B \in R, b = f(B)$ 。 $f$  は準同型なので  $f(A) + f(B) = f(A + B)$  なので、 $g(f(A) + f(B)) = g(f(A + B)) = A + B$ 。よって、左辺  $= A + B$ 。一方、 $g(a) + g(b) = g(f(A)) + g(f(B)) = A + B$  なので、右辺  $= A + B$  でもある。

系（中国剰余定理の簡易版）：可換環  $R$  とそのイデアル  $I, J$  について、環準同型

$$f : R \rightarrow (R/I) \times (R/J), \quad r \mapsto ([r]_I, [r]_J)$$

は、単射環準同型  $\bar{f} : R/(I \cap J) \rightarrow (R/I) \times (R/J)$  を誘導する。

証明： $\text{Ker } f = I \cap J$  を示せばよいが、 $f$  の定義より明らか。

例： $R = \mathbb{Z}, I = 2\mathbb{Z}, J = 3\mathbb{Z}$  とすると、 $I \cap J = 6\mathbb{Z}$  で、

$$\mathbb{Z}/6\mathbb{Z} \rightarrow (\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/3\mathbb{Z}), \quad [r]_{6\mathbb{Z}} \mapsto ([r]_{2\mathbb{Z}}, [r]_{3\mathbb{Z}})$$

が単射環準同型と言っている。この例では、もちろん環同型でもある。

イデアルの演算： $R$  を可換環、 $I, J$  をそのイデアルとする。以下は  $R$  のイデアルである(容易)。

(1)  $I + J := \{i + j \mid i \in I, j \in J\}$  (和。有限個のイデアルの和も同様)。

(2)  $I \cap J$  (共通部分)。

(3)  $IJ := \bigcup_{n \geq 0} \left\{ \sum_{k=1}^n i_k j_k \mid i_k \in I, j_k \in J \right\}$  (積。有限個のイデアルの積も同様)。

(4)  $(I : J) := \{r \in R \mid \forall j \in J, rj \in I\}$  (商)。

(5)  $\sqrt{I} := \{r \in R \mid \exists n \geq 0, r^n \in I\}$  (根基)。

例： $R = \mathbb{Z}$  で、 $a, b \geq 1$  について  $I = (a) (= a\mathbb{Z}), J = (b)$  のとき

$$(a) + (b) = (\text{gcd}(a, b)), \quad (a) \cap (b) = (\text{lcm}(a, b)), \quad (a)(b) = (ab).$$

定義：可換環  $R$  のイデアル  $I, J$  が互いに素とは  $I + J = R$ .

注意： $I + J = R$  は以下と同値： $\exists i \in I, \exists j \in J, i + j = 1_R$ .

定理：可換環  $R$  の互いに素なイデアル  $I, J$  について

- (1)  $IJ = I \cap J$ .
- (2)  $R/IJ \rightarrow (R/I) \times (R/J), [r]_{IJ} \mapsto ([r]_I, [r]_J)$  は環同型写像.

証明：(1)  $IJ \subseteq I \cap J$  は明らかなので、 $IJ \supseteq I \cap J$  を示す：仮定より  $\exists i_0 \in I, \exists j_0 \in J, i_0 + j_0 = 1_R$ .  
よって  $x \in I \cap J$  について、 $x = xi_0 + xj_0 \in IJ$ .

(2) (1) と中国剰余定理の簡易版より、写像の全射性を言えばよい： $([a]_I, [b]_I) \in (R/I) \times (R/J)$  について、 $y = bi_0 + aj_0$  とすると、 $[y]_I = [a]_I, [y]_J = [b]_J$  である.

定理（中国剰余定理，CRT）：可換環  $R$  のイデアル  $I_1, \dots, I_n$  が、任意の  $1 \leq i \neq j \leq n$  について  $I_i + I_j = R$  ならば、

- (1)  $I_1 \cdots I_n = I_1 \cap \cdots \cap I_n$ .
- (2)  $R/I_1 \cdots I_n \rightarrow (R/I_1) \times \cdots \times (R/I_n), [r]_{I_1 \cdots I_n} \mapsto ([r]_{I_1}, \dots, [r]_{I_n})$  は環同型写像.

証明： $n$  についての帰納法 ( $n = 1$  は明らかで、 $n = 2$  はすぐ前でやった).

- (1)  $i = 1, \dots, n - 1$  について  $x_i \in I_i, y_i \in I_n$  を  $x_1 + y_1 = 1_R, \dots, x_{n-1} + y_{n-1} = 1_R$  と取る.

$$1_R - x_1 \cdots x_{n-1} = (x_1 + y_1) \cdots (x_{n-1} + y_{n-1}) - x_1 \cdots x_{n-1} \in I_n$$

なので、 $J := I_1 \cdots I_{n-1} (= I_1 \cap \cdots \cap I_{n-1})$  とすると、 $J + I_n = R$ . よって  $J I_n = J \cap I_n$ .

- (2)  $R/J I_{n-1} \xrightarrow{\sim} (R/J) \times (R/I_n)$  から従う.

例（105 減算）： $R = \mathbb{Z}, I_1 = 3\mathbb{Z}, I_2 = 5\mathbb{Z}, I_3 = 7\mathbb{Z}$  とすると

$$\mathbb{Z}/105\mathbb{Z} \xrightarrow{\sim} (\mathbb{Z}/3\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/5\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/7\mathbb{Z}), [r]_{105\mathbb{Z}} \mapsto ([r]_{3\mathbb{Z}}, [r]_{5\mathbb{Z}}, [r]_{7\mathbb{Z}}).$$

これは整数  $n$  の 3, 5, 7 の余りを知ることと、 $n$  の 105 の余りを知ることが同値であると言っている.

注意： $R = \mathbb{Z}[x], I = (2), J = (x)$  とすると、 $I + J = (2, x) \subsetneq \mathbb{Z}[x]$  なので（つまり  $f(x), g(x) \in \mathbb{Z}[x]$  をうまく選んで  $1 = 2f(x) + xg(x)$  とは出来ない）、 $I$  と  $J$  は  $\mathbb{Z}[x]$  のイデアルとしては互いに素ではない（「 $\mathbb{Q}[x]$  のイデアルとしては」互いに素である）.

注意： $A = (a_{ij})_{1 \leq i, j \leq n} \in M_n(\mathbb{Z})$  について

$$|\det A| \leq \prod_{j=1}^n \sqrt{a_{1j}^2 + \cdots + a_{nj}^2}$$

なので、十分たくさんの素数  $p$  について、 $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$  で  $\det A$  を計算すると、CRT から  $\det A \in \mathbb{Z}$  を復元できる。 $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$  は体なので（次回示す）、ガウス消去法を行列式の計算に用いることができる.